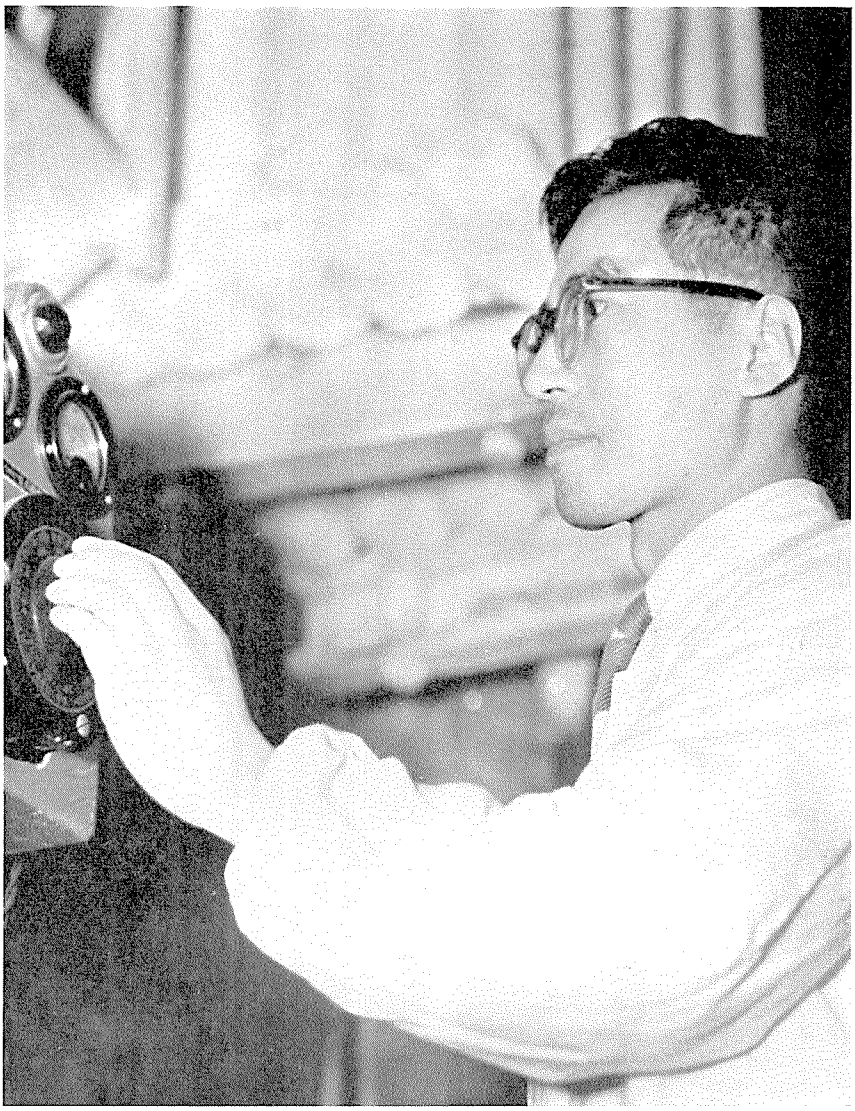
HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	照本勲博士の死をいたむ
Author(s)	朝比奈, 英三
Citation	低温科學. 生物篇, 25
Issue Date	1967-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/17732
Type	other
File Information	025.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP



照　本　　勲 博士

大正 13 年 — 昭和 42 年

1924 — 1967 年

照本勲博士の死をいたむ

当研究所所員照本勲博士は長い闘病の努力も効なく昭和42年10月22日になくなった。僅か43年の生涯であった。

照本博士は北大理学部植物学教室を卒業後，更に1年間同教室で大学院特別研究生として勉学を続けた後，昭和24年から低温科学研究所に入り，当時の生物学部門主任であった青木廉教授のもとで植物の凍結に関する研究をはじめた。終戦後の万事につけて不自由な時代に青木研究室において食用の馬鈴薯を材料とし，手作りの熱電対を道具としてはじまった低温生物学の研究は其後各方面において内外に著名な成果を挙げるに至ったが，照本博士は青木教授の忠実な協力者として「縁の下の力持ち」的な努力を重ねていた。

照本博士の研究対象は馬鈴薯の凍結曲線にはじまり，その後各種の顕花植物を材料として耐凍性の細胞生理学的な探究に進んだが，昭和34年ごろより阿寒湖の天然記念物として有名なマリモを材料として手がけたことからこの植物のもつ特異な生理学的性質にひかれ，以後低温生物学の分野で従来ほとんど未知であった藻類の耐凍性の研究に新しい境地を開いて行った。昭和26年より昭和41年までの16年間に博士が発表した研究業績は二十数篇に及び，そのうち二十三篇はすべて低温生物学に直接連関した内容のもので，いずれも低温科学研究所の出版物に発表された。特に絶筆となった“Frost Resistance in Algae Cells”は低温科学研究所創立25週年を記念して開かれた国際会議で発表され，内外の参加者から多くの反響があった。

博士はもともと頑健という体ではなかったが，昭和29年ごろ呼吸疾患につき要注意との診断をうけ以後療養につとめつつ研究を続けていた。今にして想えばこのとき研究を一時中断しても療養に専念するよう説得することがわれわれのつとめであったのであるが，当初病勢がきわめて緩慢で急進するようにはみえなかったことと，研究を少しでも進展させたいという博士の強い願望がわれわれのすすめを押し切ったのであった。昭和38年より1年間の病床生活の後一旦軽快となって研究所に出られるようになってからは博士自身も極力自重していたが，さきに挙げた国際会議に発表するための論文を脱稿直後に倒れて再入院し，遂に病床よりかえられなかった。

現在も低温科学の原野には未知の花が数知れず蕾をのぞかせている。彼照本博士はそのいくつかを手にとることができたが，まだほとんどそれらを開花させることなく生涯を終ってしまった。実験的の研究をやりとげるために健康が何より重要であるという事実は古くから唱へられていながら案外認識されていないようにみえる。われわれがこの点に充分留意して，照本博士が熱望しつつも果し得なかった研究を発展させてゆくことこそ，業半ばにして倒れた彼に対するせめてものはなむけであろう。

昭和42年11月

朝比奈英三